

〔瑤囊抄六〕恒娥ト云ハ何ナル事ゾ

恒娥ハ月ノ異名也、遊仙窟ニ恒娥月人女也ト讀メリ、實ニハ人名也、恒娥ハ羿ガ妻也、作仙藥以欲服之、然恒娥偷服之、成仙人奔テ入月中云々、仍爾云也、羿ハ有窮ノ君也、篡夏后相位ト云リ、昔精兵ノ射手也キ、サレバ論語曰、羿善射ト云々、加之月異名多侍リ、

銀鈎 玉鈎 銀光 玉鏡 金魄 金波 菟輪 菟影 兔魄 兔月 桂輪 桂影 仙娥

陰精 虛弓綴月名也 蛾眉同上 破鏡中月也

御空行月讀壯子ユフサラス目ニハミエテ、ドヨルヨシモナキト侍リ、月神ヲバ月弓ノ尊共、月夜

見ノ尊共、月讀神共、尊共申也、ヤイユエヨハ相通ナレバ、同ジ御名ナルベシ、亦月人男共云リ、略中

童蒙抄云、月夜見男トハ桂男也ト云々、然バ月人男モ桂男也ト云ベシ、世人ノ思ハク、月中ニ桂木

有、其木ノ本ニ人有、是ヲ桂男ト云ト、サレバ月ノ桂ト云、月兔ト云、桂男ナント云、皆是月ノ中ニ有

ト云共、皆只月ノ名ニ出セリ、然ニ空ニ見ルハ月輪也、月天子ハ其ノ上ニ住給トナン、月天子ハ

即月神也、サレバ月輪ヲ月ノ船共云、月天子ヲ月神共云ハ、月讀男、月人男、佐散良衣男、桂男、皆同ク

月名也共云ヘリ、

〔瑤囊抄九〕月ノ中ニ有兔云々、就之其義多ケレ共、只過去ノ靈兔ノ白骨ヲ取テ、帝釋月中置給故、

ト云々、玄贊要集第十云、問云、月中ノ兔ハ何ニ因テ有ルゾヤ、答云、未曾有經ニ説ク、波羅底斯國、烈

士池ノ西ニ有獸率都婆狐猿兔、彼是菩薩ノ行ヲ修之處、當時爲一兔、燒身供養、帝釋將骸骨安在月

中、以示天下人ト云々、又法苑珠林云、依西國傳云、過去有兔、行菩薩行、帝釋試云、索目欲食、捨身火中、

天帝怒之、取其焦置月中、令未來衆生知是過去菩薩行慈之身、

〔日本釋名上象〕月 是亦自語なるべし、或説に盡也、かけて皆つくる也、劉熙が釋名に、月は缺也ト

いへるに似たり、凡神代の言は、今よりはかりがたし、且又自語おほかるべし、今みだりに其義を